

マチュウ・コプランが構想する  
「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」  
——形式の革新的再物質化としての  
『パーフェクト・マガジン』(2003)に着目して

遠藤萌

はじめに

2021年に銀座エルメスフォーラムで、『『エキシビション・カッティングス』マチュウ・コプランによる展覧会』<sup>(1)</sup>という展覧会が開かれた。その展覧会では、展覧会の制度について再考する《The Anti-Museum: An Anti-Documentary》(2021)という映像作品が上映されていた。本論は、この映像作品に注目し、コプランが考えるキュレーションの独自性を明らかにし、コプランの初期キュレーションとも言える2003年に出版された雑誌『パーフェクト・マガジン』<sup>(2)</sup>の内容を分析する。そこからコプランが、何も展示しない「空虚、回顧」展“Voids. A Retrospective”<sup>(3)</sup>「閉鎖された展覧会の回顧」展“A Retrospective of Closed Exhibitions”<sup>(4)</sup>への構想を深めて行ったことを明らかにする。

1. マチュウ・コプランとは

マチュウ・コプラン(Mathieu Copeland,1977-)は1977年にフランスのラニー＝シュル＝マルヌで生まれ、現在はロンドン拠点として活動するフランス／イギリス人キュレーターであり、リーズ芸術大学などでも教鞭を執っている。コプランはニューカッスル大学でファインアートを学んだ後、ゴールドスミス大学でキュレーションの修士号取得し2021年にキングストン大学で博士号取得している。またニコラ・ブリオーの『関係性の美学』<sup>(5)</sup>の英訳にも参加していることで知られている。2004年からキュ

マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

レーターとして活動し始め伝統的な展覧会の役割を再検討し展覧会の認識を刷新するような実践を続けている。代表的な展覧会として2009年にポンピドゥーセンターとクンストハレ・ベルンで共同キュレーションした「空虚、回顧」展そして、2016年にクンストハレ・フリアール・フリブールで行われた「閉鎖された展覧会の回顧」展がある。また、ハンス・ウルリッヒ・オブリストとステファニー・モワドンがディレクターを務めた2007年のリヨンビエンナーレでキュレーターの一人として選ばれている<sup>(6)</sup>。

## 2. 『『エキシビション・カッティングス』マチュウ・コプランによる展覧会』

『『エキシビション・カッティングス』マチュウ・コプランによる展覧会』は、コプランが初めて日本でキュレーションした展覧会であり、「育まれる展覧会」と「アンチ・ミュージアム：アンチ・ドキュメンタリー」という2つのパートで構成されていた。同展では、「カッティングス」という言葉の持つ意味に焦点をあて、植物の「挿し木・接ぎ木」という意味と新聞などの切り抜きや映画の編集作業という2つの意味から空間を構成した<sup>(7)</sup>。「アンチ・ミュージアム：アンチ・ドキュメンタリー」のパートで上映された映像作品《The Anti-Museum: An Anti-Documentary》は、2016年の「閉鎖された展覧会の回顧」展とコロナ禍の美術業界の出来事などの要素によって構成されていた。内容は「マニフェスト」から始まり「閉鎖」「反展覧会」「反芸術」「反美術館」「反文化」「すべては芸術」の6つのパートの順に形成されていた。それはコロナ禍で多くの文化施設が閉鎖された状況で作家が芸術行為、あるいは自らの決断において展示を閉鎖した歴史、それらの意味を問いアートや展示空間における制度性や議論を再構築しようとする試みであった。映像は、コプランと作家たちの対談や議論する場面、過去に行われた空虚な展示そして歴史的な出来事の映像やアーカイブがコラージュ的に編集されていた。

### 3. コプランの出版物について

コプランは2004年から現在まで多くの展覧会をキュレーションしてきた。これらの展覧会についてはコプラン自身のホームページ<sup>(8)</sup>に詳しく記載されている。コプランのホームページでは、展覧会と彼の出版物が並行して記載されていることが確認できる。対して近年活動するインディペンデントキュレーターの多くは、過去の展覧会と出版物のアーカイブは別ページに配置することが多く見られる。この配置からコプランは展覧会と出版物を同等に重要視していることが考えられる。また、コプランの展覧会は2004年から開始されていることに対して出版物は2003年から行われていることがホームページからわかる。その出版物が2003年に上梓された『パーフェクト・マガジン』（以下『PM誌』と表記）である。

『PM誌』は、現代アートの出版物を中心としているディジョンの *les presses du réel* から出版されているが、この出版社からブリオーの『関係性の美学』も出版されている。『PM誌』は、作家やキュレーター、思想家など全42組をとりあげて編集され、創刊号かつ最終号として出版された。コプランにとって、この雑誌の編集は、キュレーションを意味していた。

この雑誌で取り上げられている42組の内訳は、作家が27組、写真家が3名、キュレーター6名、そして思想家など6組となっている。また、対談者のハンス・ウルリッヒ・オブリストとキュレーターのトム・マーティンなどを含めると、この雑誌には44組が取り上げられている。この雑誌で扱われた作家は、ギルバート & ジョージから始まり、サイモン・パターソン、アンジェラ・ブロック、リアム・ギリック、マーティン・クリードなどのゴールドスミス大学出身者やYBAの作家。そして、コプランが2004年に初めて展覧会を企画するセリス・ウィン・エバンスやローレンス・ウェイナーなどのコンセプチュアルアートの作家。さらに、マウリツィオ・カテランが関わっている *The Wrong Gallery* についてのインタビューなども掲載されている。

『PM誌』では、作家の作品やテキストの掲載だけにとどまらず、美術評論家のガイ・ブレット、現在クストハレ・バーゼルのディレクター兼館長のエレナ・フィリポビッチ、キュレーター兼美術評論家のエリック・トロンシーのテキストも掲載され

ている。そして、『PM 誌』の 114 頁には、「パーフェクト・マガジンはエクスパット・アート・センターの制作物です」と記載される。この「エクスパット・アート・センター」<sup>(9)</sup> は、コプランが 2004 年から 2005 年にかけて 6 カ所で行われた展覧会名であり、この雑誌を作成する時点でこの展覧会の企画を構想していたことが考えられる。さらに 125 頁には、1997 年から agnès b. が発行する、クリスチャン・ボルタンスキーとオブリストの対談から生まれたフリーペーパーの「ポアンディロニー」<sup>(10)</sup> の感嘆符が掲載されている。この感嘆符は 19 世紀の終わりにフランス人作家のアルカンテール・ド・ブラムによって提唱され、それは皮肉めいた内容を指し示すために文章の最後に使われたものである。その感嘆符の下には、2003 年までに発行された「ポアンディロニー」の号数と特集号の点と作家の名前が記載されている。そして、その下にはサイトの URL が掲載されている。

1997 年の創刊から 2003 年まで「ポアンディロニー」で発行された号は通常号と特別号を合わせて 34 号である。担当した作家数は 32 組であり、その中で『PM 誌』の目次上では 3 組の作家が取り上げられている。その 3 組は、1998 年の 7 号と 2002 年の 26 号を担当したボルタンスキー、1997 年の 1 号と 2001 年の 26 号を作成したギルバート & ジョージ、そして 1998 年 5 号を作成したローレンス・ウェイナーである<sup>(11)</sup>。そのうちボルタンスキーの頁には、オブリストによるボルタンスキーへのインタビュー記事が掲載されており、その内容はジェームス・リー・バイヤースとの会話からボルタンスキーの作品制作に関するものであった。そして次の頁には、ボルタンスキーがディレクションしたポワンディロニーのバイヤースへの追悼特集号「The Perfect Death」<sup>(12)</sup> が掲載されている。

ところで、オブリストが 1996 年から 1997 年にパリ市近代美術館で行った、1990 年代後半にロンドンで活躍した作家やアートシーンを紹介した展覧会「life /live」<sup>(13)</sup> は、当時活躍していた作家やギャラリーを確認することが出来る。この展覧会では、ダミアン・ハーストなどの作家はもちろん、『PM 誌』で特集されている作家なども多くギルバート & ジョージ、アンジェラ・ブロック、リアム・ギリック、セリス・ウィン・エバンスなどがこの展覧会に参加していた。また、この後コプランと展覧会を頻繁に行うグスタフ・メッツガーも取り上げられている。作家だけではなく、この「life/

live」では、ギャラリーやアートスペースの紹介も行っており、『PM 誌』でも取り上げられているアート・コレクティブのBANK<sup>(14)</sup>も紹介されている。この展覧会からコプランの学生時代のロンドンのアートシーンが確認できるが、そういった状況が『PM 誌』に反映していることが確認できる。このことから、オブリストがコプランに影響を与えていたとも考えることが出来よう。

『PM 誌』の最後の頁には、2001年にターナー賞を受賞したマーティン・クリードが2003年に作成した作品《work290》(2003)があり「EXSTR BILT」と書かれている。また、右頁にForma<sup>(15)</sup>というロンドンのサザークに拠点を置く現代芸術団体のロゴらしきものとそのサイトのURLが記載されている。コプランは2006年にロンドンのFormaとリヨン現代美術館で「展覧会のサウンドトラック」展“Soundtrack for an Exhibition”<sup>(16)</sup>という展覧会を企画している。

『PM 誌』では、コプランがこれら作家を選ぶにはあたり、agnès b.の「ポアンディロニー」が影響を与えたことが考えられる。しかし、「ポアンディロニー」はフリーペーパーとして無料で配布されていたことに対して、『PM 誌』は、廉価で販売されていた。また、刊行物を識別するための国際的なコード番号ISSN番号やISBN番号、目次に存在した不動産コンサルタント会社のKing Sturgeの広告などが存在した。それは、コプランが一般雑誌を出版することの偽装によって、自らのキュレーションを実行したことを意味している。『PM 誌』のプレスリリースでは、次のようにコプランは説明している。

『PM 誌』は、バーコードやISBN番号、広告、文章、写真、図面、流通、高品質な印刷など、私たちが雑誌と理解するものをすべて備えた出版物を作りたいという願望から生まれました。しかし、それは雑誌であり、カウンターマガジンでもあります。雑誌が読者とコミュニケーションをとる通常の方法を逆転させ、読者に注目を集めて焦点を当てます。グループ展であると同時にアートワークでもある『PM 誌』は、真の社会的で民主的な行為を表しています<sup>(17)</sup>。

また、美術批評家のエミリー・レナードは、同社が出版する美術批評誌「Trouble

マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

n° 05」(トラブル5号)において、この雑誌について次のようにのべている。

この雑誌は、白いページに白いインクで印刷された単行号という最小限の状態に単純化されている。『PM 誌』の編集プロジェクトは、そのグラフィズムによって制約されている。この雑誌は集団的な展覧会として提示されており、そのキュレーションプロジェクトは、この雑誌が課す物質的制約によって定義されます。真っ白な背景は内部を均等化し、消し去り、打ち消します。雑誌の流布が、それ自体の内容を勧め打ち消すとき、それは自らを完全に完璧な芸術作品とみなすのだろうか？<sup>(18)</sup>

エミリー・レナードがこのように雑誌の印刷用法について注目するように、『PM 誌』の内容を見るまたは読み解くことは困難である。だが、蛍光灯の下またはブラックライトを使用することで見る事が出来る。また、ここで示されている物質的制約とは、出版物という物質を意味するが、コプランが形式の再物質化を問題にするのは、実際の展示と出版物における展示の差異に関する問題意識の表れと筆者は考える。

『PM 誌』を出版した後、コプランは展覧会と出版物を同様に制作することが多く、代表的な展覧会の「空虚、回顧」展や「閉鎖された展覧会の回顧」展も展覧会と出版物を同時に作成した。「空虚、回顧」展では、1958年のイヴ・クラインによる「第一物質の状態における感性を絵画的感性へと安定させる特殊化」展のほか、何も展示しない9つの展覧会が再現され、大部な図録が発行された。図録には、9つの空虚の展示とそのドキュメント資料の他、58名の作家たちが、一人一頁ずつ自由に作品を提示する紙上展覧会<sup>(19)</sup>も含まれ、図録自体が展覧会として機能する仕組みになっていた。そして、『PM 誌』は、この二つの革新的な展覧会の構想に影響を与えたことが伺える。次に、「閉鎖された展覧会の回顧」展を取り上げる。

「閉鎖された展覧会の回顧」展は2016年にスイスのフリブールで開催された。展示会期中に展示会場もしくは施設が閉鎖された11組の展覧会を再現した。この展覧会はコプランと施設ディレクターバルタザール・ロベールがキュレーションを行い、そのカタログは*The Anti-Museum: An Anthology*<sup>(20)</sup>として出版されている。このカタロ

#### マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

グの総頁数は794頁と大部であり、掲載されている作家数は約85組で書籍の紙の素材はわら半紙のような安価なものである。この展覧会の最後の展示は、ハイレッドセンターが1964年に内科画廊で行われた「大パノラマ展」を元としている。この展覧会は、展示初日に画廊を閉鎖し展示終了日に画廊を開放した。同時に、ギャラリーを封印するという最小限の介入によって彼らはギャラリーの外に存在していた平凡な世界全体を、赤瀬川が後に説明するように「素晴らしいパノラマ」に変えた<sup>(21)</sup>。2016年の展示でも元の展覧会同様に木の板でドアを閉鎖し、展覧会の最終日にハイレッドセンターの展示にあった木の板などをはがし、展覧会の書籍の刊行記念イベントが行われた。この展示では、会場の入り口または施設自体が閉鎖された。閉鎖したドアの入り口や壁にキャプションが存在したが、作家によっては何も説明がない展示も存在した。

この11組の展覧会の終了時に書籍が刊行されたが、その書籍は143頁まではこの展覧会に関するテキストが掲載されている。143頁以降からは、80人以上の作家と作家が含まれ、「反芸術」「反作家」「反展示」「反建築」「反哲学」などのテーマを通じて美術機関への異議の歴史をたどっている。これらの状況から筆者はコプランにとって書籍は一般的な図版やガイドブックではなく、書籍自身が「反美術館」という展覧会であったと解釈する。それは、何も展示されていない会場と展覧会の詳細また「反美術館」という概念を広範に探求したアンソロジーを発行することにより展覧会の再物質化を書籍という形で行なっている。

#### 4. 「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

この展覧会と出版物の関係性についてコプランは博士論文で言及している。その論文が、キングストン大学に提出された博士論文「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ形式の革新的再物質化としてのキュレーション」*Manifest paper exhibitions: curating as a radical re-materialisation of forms.*<sup>(22)</sup>である。コプランは、この論文内で展覧会のカタログについてこのように見解を述べている。

マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

カタログは一般的に、展覧会に出品された作品の詳細を公開するものである。それは、展覧会を構成した作品の画像や、展覧会そのものの様子を「再現」したものである。カタログは、よく言えば展覧会の記憶であり、悪く言えば展覧会のチェックリストである。カタログはまた、展覧会をさらに発展させるための手段でもある。何が展示されたかを言葉によって伝え、それが何についてだったかを説明し、そのコンセプトやアプローチを紙の上で展開する。しかし、なぜほとんどのカタログは、展覧会の壁面テキストを少し拡大しただけのものなのだろうか？ カタログとは、展覧会の立体性をページに平らにしただけのものなのだろうか？<sup>(23)</sup>

「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」は、コプランが展覧会はカタログでありカタログは展覧会であるという複雑な自律的実体を通して、キュレーションの本質的な再物質化を提案した。コプランは、初期から展覧会だけでなくカタログにも焦点を置いていたことが『PM 誌』から確認できた。またカタログを一つの展覧会としてキュレーションする問題意識があり展覧会とカタログの関係性について初期段階から重要視していた。

## おわりに

以上、マチュウ・コプランについてそして彼の出版物について分析してきた。この分析を通じて明らかになったのは、コプランが展覧会と出版物の両方を重視し異なる媒体を通じてキュレーションを試みているという点である。彼が2003年に出版した『PM 誌』は、単なる雑誌を超え展覧会としても機能し読者に新たな視覚体験を促す試みであった。また、この出版物を作成するにあたり1990年代後半のロンドンのアートシーンや「ポアンデロニー」、そしてこのフリーペーパーを創設したオブリストの影響を受けたことが考えられる。

コプランのキュレーション手法は、伝統的な形式を越え展覧会と出版物が相互に補完し合いながら新たな文化的対話を生み出す可能性を示しているといえよう。さらに、



マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

コプランの博士論文「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」では、展覧会と出版物の関係性に焦点を当てていることが明らかになった。コプランは、展覧会とカタログが密接に結びついた存在であるとし両者が複雑な役割を果たすべきであると示す。以上のことから、コプランはカタログ自体が独立して展覧会のように機能する可能性を示唆しておりキュレーションの新たな形態を提示しているといえよう。

註

(Web サイトの最終閲覧は全て 2024 年 11 月 14 日)

- (1) 銀座エルメスフォーラム「エキシビション・カッティングス」 <<https://www.hermes.com/jp/ja/content/maison-ginza/forum/210423/>>
- (2) Mathieu Copeland, *Perfect magazine*, les presses du réel, 2003
- (3) Matthieu Copeland (Editor), Clive Phillpot (Editor), John Armleder (Editor), Mai-Thu Perret (Editor), *VOIDS: A Retrospective*, Jrp Ringier Kunstverlag Ag, 2009
- (4) Kunsthalle Friart Fribourg ホームページ「A Retrospective of Closed Exhibitions」 <<https://friart.ch/en/exhibitions/2016/a-retrospective-of-closed-exhibitions>>
- (5) Nicolas Bourriaud, *Relational Aesthetics*, les presses du réel, 2002
- (6) Hans Ulrich Obrist (Editor), Stephanie Moisdon (Editor), *Lyon Biennial 2007: 00S -The History of a Decade That Has Not Been Named*, Jrp Ringier Kunstverlag Ag, 2008
- (7) 銀座エルメスフォーラム、「エキシビションカッティング マチュウ・コプランによる展覧会」冊子 2021 年
- (8) マチュウ・コプラン ホームページ「EXHIBITIONS」 <<http://www.mathieucopeland.net/>>
- (9) CAC ホームページ「Expat-art Centre / EAC」 <<https://cac.lt/en/exhibition/expat-art-centre-ea-c/>>
- (10) le point d'ironie ホームページ「Home」 <<https://www.pointdironie.com/index.php>>
- (11) le point d'ironie ホームページ「archive」 <<https://www.pointdironie.com/index.php>>
- (12) le point d'ironie ホームページ「James Lee Byars」 <<https://www.pointdironie.com/in/SPjamesleebyars/jamesleebyars.php>>
- (13) Musée d'Art Moderne de la Ville de Paris, *Life/Live*, Paris-Musees, 1996
- (14) *ibld.* p. 33

マチュウ・コプランが構想する「マニフェスト・ペーパー・エキシビションズ」

- (15) FORMA ホームページ「Home」< <https://forma.org.uk/> >
- (16) FORMA ホームページ「Soundtrack for an Exhibition」< <https://forma.org.uk/projects/soundtrack-for-an-exhibition>>
- (17) 『PM 誌』 プレスリリース < [http://www.mathieucopeland.net/PERFECT\\_PressRelease.pdf](http://www.mathieucopeland.net/PERFECT_PressRelease.pdf) >
- (18) les Presses du réel『PM 誌』 紹介ページ < <https://www.lespressesdureel.com/ouvrage.php?menu=&id=365>>
- (19) 椎原伸博『現代美術における展覧会の再展示について「空虚、回顧」展、「態度が形になるとき」展、「大地の魔術師達」展をめぐって』、『実践女子大学文学部紀要』2024年、17-33頁
- (20) Matthieu Copeland (Editor, Introduction), Balthazar Lovay (Editor), Jon Hendricks (Editor), & 10 more, *The Anti Museum*, Koenig Books, 2017
- (21) *ibid.* p.55
- (22) Mathieu Copeland, *Manifest paper exhibitions: curating as a radical re-materialization of forms*, London: Kingston University, 2020 < <https://eprints.kingston.ac.uk/id/eprint/53588/> >
- (23) *ibid.* p.20